

機関番号：52604  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20720143  
 研究課題名（和文）異文化コミュニケーションの史的研究  
 ーヴィンチェンツォ・チマッティと日本語ー  
 研究課題名（英文）Fr. Vincenzo Cimatti and the Japanese Language – A Historical Study  
 of Intercultural Communication and Japanese Language Acquisition  
 研究代表者  
 村田 昌巳 （MURATA MASAMI）  
 サレジオ工業高等専門学校・一般教育科・講師  
 研究者番号：40390471

## 研究成果の概要（和文）：

1926（大正15）年に宣教師団を率いて来日したサレジオ会イタリア人神父ヴィンチェンツォ・チマッティは、布教のために日本語の学習に励んだ。しかしながら、非効率的な学習環境により、その高い志にもかかわらず日本語の習得は高い水準には達しなかった。当然ながら個人的な能力の問題もあろうが、時期的には、外国人の視点からの日本語研究も日本国内で行われ、また、イタリア国内でも当時日本語教育が行われていた事実もあることから、学習に必要な情報及び教材の欠如・不足がその主たる要因であると結論づけた。

## 研究成果の概要（英文）：

This research has examined the attempts made by the Italian priest Fr. Vincenzo Cimatti to study the Japanese language in Japan. Fr. Cimatti, who brought the Salesian Society of Roman Catholic Church to Japan in 1926, needed to acquire a good working knowledge of the Japanese language quickly and was thus highly motivated. However, his hard study did not bring about the results he had hoped for. In fact, he never achieved a high level of ability in the Japanese language. Although this was certainly due to a certain extent on a lack of aptitude on his part, it was not the main reason. The chief reason for his failure to acquire the target language was that he did not have sufficient access to the information and the relevant study materials that were necessary for the successful acquisition of the target language. This conclusion has been drawn because in 1926 quite an amount of material for studying the Japanese language as a foreign language had already been published. Furthermore, by that time the teaching of the Japanese language had already been started in Italy.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	200,000	60,000	260,000
2009年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総計	300,000	90,000	390,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：異文化コミュニケーション史、イタリア人宣教師、日本語習得

## 1. 研究開始当初の背景

宣教師の手になる数々の文献は、欧米人の日本語の捉え方や編纂当時の日本語の姿を知る一級資料として、日本語学・日本語学史において高く評価され研究も進んでいる。

世界的にも、宣教師の遺した言語学的業績を再評価しようという気運が高まりつつあり、Missionary Linguistics（宣教に伴う言語学）という分野としてここ数年研究が盛んになってきている。

しかしながら、未だ日の目を見ない文献も多く、特にサレジオ会関係資料の研究は進んでいない。また、異文化コミュニケーション研究の分野は近年大きな発展を見るが、歴史的な視点からの研究が積極的になされているとは言い難い。

これらの理由により、1926（大正15）年に宣教師団を率いて来日したサレジオ会神父ヴィンチェンツォ・チマッティ Vincenzo Cimaati が、来日後どのように日本語の習得に取り組み、異文化コミュニケーションを実践したのか明らかにする必要があると考え、それが本研究の着想となった。

## 2. 研究の目的

日本語の構造を考える場合、「内から見た日本語」だけでなく「外から見た日本語」にも意識を向けることで、より広範な事実をより詳細に理解することが可能となる。そして、「外から見た日本語」を本格的に研究するのであれば、日本語学・日本語教育学よりもさらにスコープの広い「異文化コミュニケーション」の視点が不可欠であると考えに至った。宣教師が遺した文献を単に言語研究のためのデータとして取り扱うのではなく、その文献の成立に至る著者の努力・格闘・苦悩の過程を明らかにする必要もあると考えたわけである。

こういう動機付けのなか、以下の2点を基本目標に掲げ研究に従事した。

- ・ イタリア人神父チマッティの日本語学習に関する文献を収集し、その学習の足跡を辿り記述すること
- ・ 異文化コミュニケーション理論の枠組みの中で、チマッティの外国語習得の過程とその結果を考察し、異文化コミュニケーションの史的実践すること

## 3. 研究の方法

本研究は、下記の基本方法設定のもと、文献調査及びチマッティ資料館館長ガエタノ・コンプリ神父へのインタビューを中心に進めた。

- ・ 2008年度：チマッティ資料館（東京都調布市富士見町3-21-12 サレジオ神学院内）での文献調査をもとに、チマッティ日本語学習について記述する
- ・ 2009年度：チマッティの外国語習得の過程とその結果について、異文化コミュニケーション史的観点から分析・記述する

## 4. 研究成果

### (1) 学習方法－非効率的環境

資料の収集・分析を通して、チマッティの日本語学習の方法・環境に関して、下記の事実が判明した。

- ・ 教材として尋常小学校用教科書（読本）を使用した
- ・ チマッティの母国語イタリア語を解する日本人が周囲にいなかったため、先に到着滞在していたフランス人宣教師やフランス語を解する日本人から、フランス語を媒介言語として教授を受けた
- ・ 46歳での来日ながら粉骨砕身の努力をもって日本語の知識獲得を目指し、さらには自身の音楽的教養・技術を駆使して、日本語詩にメロディをつけて学ぶ独自の日本語学習スタイルも構築した
- ・ 布教に対する「志」という高いモチベーションが学習意欲を高めたが、自身の記憶力の衰退を嘆くといった、学習者に頻発しがちなフラストレーションも抱えていた

現在の一般的な外国人対象日本語教育とは大きく異なる学習の方法・環境であり、日本語習得のためにチマッティが費やした労力は計り知れない。それは布教という高い志（モチベーション）に支えられてのことではあったが、その最終的な習得レベルは決して成功と呼べるものではなかったことが彼を直接知る人々の証言を記した文献より明らかとなった。

## (2) 学習成果—不成功の要因

チマッティの遺した書簡等は、ガエタノ・コンプリ編・訳『チマッティ神父の手紙』[現在 1932 年分まで 4 巻刊行] (2003 年—2006 年、ドン・ボスコ社刊) に纏められている。

書簡及び日誌の内容を確認すると、直截的に言明されているわけではないが、日本語学習のための情報資源の不足が見て取れる。

チマッティの最終的な日本語習得レベルが決して成功と呼べるものではなかったことを先に述べたが、それは個人の能力よりもむしろ「情報及び教材の欠如・不足」に最大の要因があったと考えられる。

### ① 日本国内での情報の不足

東京帝国大学日本語学・博言学教授 Basil Hall Chamberlain が著した、外国人が日本語を学習するための入門書『A Handbook of Colloquial Japanese』は 1907 年に最終版である第 4 版が上梓されている。また、外国人による日本研究誌『The Transactions of the Asiatic Society of Japan』(日本アジア協会紀要) の 1925 年版・1926 年版を繙いても、そこには G. B. Sansom による「Notes on the Japanese Language」や A. Neville J. Whymant による「The Oceanic Theory of the Origin of the Japanese Language and People」のような日本語に関する高度且つ専門的な記述も採録されている。このような外国人による日本語研究の成果にチマッティが接したという事実は、少なくとも現段階の調査では見あたらない。

チマッティが宮崎に居を構えたということで、日本国内の中央と地方における情報の質および量の差異がチマッティの日本語学習をより困難なものにしたと考えられる。

### ② イタリア国内での情報の不足

吉浦盛純著『日伊文化史考』(1968 年、イタリア書房刊)によれば、ヴェネツィアの高商学校で日本語を学び、1903 年ナポリの東洋語学校の日本語教師になったガッチノーニ Giulio Gattinoni が、1890 年に『Grammatica Giapponese della lingua parlata』(日本口語文典)を出版している。1890 年はチマッティ 11 歳の時である。その時、すでにイタリア国内では日本語教育が行われ、イタリア語で書かれた日本文典が存在したことを示している。ジェノバ港を出発して日本に向かう 1925 年、チマッティ 46 歳となるその時まで、その文典を手にするにはできなかったのか。推察の域を出ないが、チマッティの遺した書簡等の内容からすれば、このようなイタリア国内における日本及び日本語に関する情報・教材へのアクセスもなかったのではないかと考えられる。

## (3) 異文化コミュニケーション実践者たる宣教師の払う「犠牲」

限られた情報資源の中で、異文化の壁を乗り越えようとする。宣教の使命感に燃えるも、日本社会への帰属感を覚えられず不安に駆られる。遅々として進まぬ日本語獲得の現状に嘆息を漏らす。宣教師の味わう辛苦、そして宣教師の払う「犠牲」は、我々の想像を遙かに超えているのかも知れない。チマッティの遺した日誌の中に以下の一節が見られた。

「一番大きな犠牲は、否応なしに話せない子どもに返ったことである。皆、ある程度年を取っていて、勉強の魅力というよりも、義務感や意志によってのみ支えられている。何も理解できず、何もできない状態である。聖フランシスコ・ザビエルの言葉を借りると、まるで大理石でできた像のようだ。どうか、主が助けてくださいますように！

このような犠牲は、あまり人々に理解されていない。本には、宣教生活の素晴らしさや冒険のみが強調されているが、一番辛いのは、切り離されている状態にあって、何もできず、屈辱的な、気力を消耗する生活を送っていることである。」

【ガエタノ・コンプリ編・訳『チマッティ神父の手紙 1 日本との出会い』(2003 年、ドン・ボスコ社刊)より】

宣教師の遺した言語学的偉業を評価する研究者も、宣教師が精神的に切り離された状態にあって、屈辱的で気力を消耗する生活を送りながらそれらの偉業を成し遂げたという側面を看過しがちである。もちろん全ての宣教師が同様であったとは断言できないが、「宣教師達の日本語学習者・異文化コミュニケーション実践者としての側面」に光をあてる研究がますます必要であることは明らかである。

## (4) 発展的課題

チマッティの書簡には時折フランシスコ・ザビエル Francisco de Xavier の名が現れるが、同国の士たるオルガンティーノ Gnechchi-Soldo Organtino やヴァリニャーノ Alessandro Valignano についてどのような知識・情報を持っていたのかははっきりしない。特にヴァリニャーノは、チマッティとは来日に 300 年以上の隔りがあるものの、九州の諸大名を教化し、天正遣欧使節を帯同するなど、日本とイタリアの橋渡し役として活躍した。また、日本で初めて活版印刷機を導入しキリシタン版を開版、1583 年には『日本諸事要録』も著している。イエズス会とサレジオ会という修道会の違いこそあれ、日本史に名

を残した同胞の活躍をどれほど知っていたのか、そこに「情報資源の不足」はなかったのか、今後引き続き精査することで、本研究は次の重要なステップを踏み出すことになる。今後、ヴァリニャーノの日本語学習者・異文化コミュニケーション実践者としての側面も調査し、チマッティと比較対照する予定である。

(5) 関連資料「Appunti Di Grammatica Giapponese」

チマッティの日本語学習の足跡を調査する中で、「Appunti Di Grammatica Giapponese」（「日本語文法に関するノート」・1930年・Foglizzo/Canaveseにて印刷）の存在を確認した。これは、チマッティとともに来日したピエトロ・ピアチェンツァ Pietro Piacenza 神父が編集に大きく貢献したものであることがその序文に記されている。チマッティ本人が直接関係したものではないようだが、イタリア語で書かれた日本語文法書として、小冊子ながら稀少且つ貴重な資料であることは事実である。

内容を精査したところ、「Appunti Di Grammatica Giapponese」は、ラテン文法書の形式をそのまま踏襲して日本語文法を記述したものであり、全体として高い水準に達しているとは言えないものであった。しかしながら、処々に鋭い洞察も含まれていることが判明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 村田昌巳、ヴィンチェンツォ・チマッティと日本語—学習の背景—、サレジオ工業高等専門学校研究紀要、査読無、第35号、2009、9—16
- ② 村田昌巳、ヴィンチェンツォ・チマッティと日本語—研究序説—、サレジオ工業高等専門学校研究紀要、査読無、第34号、2008、19—23

〔学会発表〕（計1件）

- ① Murata Masami、Study of "Appunti Di Grammatica Giapponese" produced by the Salesians of Don Bosco、The 6th International Conference on Missionary Linguistics、2010年3月18日、東京外国語大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 昌巳 (MURATA MASAMI)  
サレジオ工業高等専門学校・一般教育科・  
講師  
研究者番号：40390471